

ロシアのウクライナ侵攻 覇権国対抗、国際関係の視点から（新版）

2022年3月25日

聴濤 弘

核の脅しをかけながら、国連憲章も国際法も無視し、ウクライナに侵攻したプーチン政権の蛮行は、いかなる理由をもってしても許すわけにはいきません。この野蛮が21世紀の、しかもヨーロッパのど真ん中で起きたことは、文明への挑戦として断固糾弾されなければなりません。直ちに無条件で停戦し、関係諸国が平和会議を開催すべきです。

切り離すことのできない二つの民族

もともとウクライナ民族とロシア民族とは切り離すことのできない民族。

◆中世に「キエフ・ルーシ」という大国があった。この最初の首都はウクライナのキエフ（9世紀）で、その後(13世紀) モスクワになる。

◆ゴルバチョフ夫人はウクライナ人。フルシチョフ夫人も。『死せる魂』、『検察官』などを書きロシア文学に不滅の金字塔を築いたゴーゴリもそう。ゴーゴリはロシア人の誇りでもありウクライ人の誇りでもある。

◆ロシア語とウクライナ語の違いは方言の差だけ。お互いに「外国人」だという意識はなかった。

◆こうした民族が仲良く暮らしていけないわけではない。それがなぜこのような敵対関係になったのか、二つの覇権国の対外政策に理由がある。

プーチン政権の政策

第一はプーチン政権の対外政策。ソ連崩壊に導いたゴルバチョフ、エリツィ

ンはロシアが「西側の一員」になったとして喜び、「ヨーロッパ共通の家」構想を外交の主軸にした。

◆プーチンも初めはアメリカを支持し同じような路線。今回、初めて明かしたことだが2000年にクリントン大統領が訪日したさい、プーチン大統領はロシアのNATO加盟を打診している（プーチン、2022年2月22日演説）。9・11、米全面支持。キルギスに米軍基地容認。

◆だが、2003年イラク戦争に反対。ロシアはヨーロッパではない、アジアをも含む「ユーラシア」であるとし「西側の一員」になれば、ロシアは西側に資源を供給する「付属物」になり「第三世界」に転落すると主張。

◆プーチンは「強い国家をつくる」のスローガンのもとに「ペレストロイカ」とは反対に民主主義を抑圧するようになった。
国家体制としては中央集権的・国家主義的な「旧ソ連邦復興路線」をとるようになる。こうして今は独裁者となった。
プーチンはさらにソ連国歌を復活。2007年に開かれたミュンヘン国際安全保障会議では、米国による「一極支配」への反対色を鮮明に打ち出した。

◆プーチンが主張するには、ウクライナが今日の事態になった根源は、レーニンがウクライナの民族自決権を認め民族主義者を鼓舞したからである。それまではもともと一つの国であった。
「ロシアのウクライナ」は「ウラジーミル・レーニンのウクライナ」になってしまった。カザクスタン暴動鎮圧。

◆大国主義意識の強いロシア人はこれを支持してきた（今後どうなるか？）。

◆ロシア共産党のことにもふれておく。共産党は現在野党第一党である。強い国家を主張し、プーチンとの共通性をもつ。ウクライナ問題では二州の独立を要求している。

欧米の対外政策——冷戦終結の曖昧さ

二つ目は欧米諸国の政策である。

「米ソ冷戦」が終結するとき、ソ連側（ゴルバチョフ）が一番心配したのは、ソ連がブレジネフ・ドクトリンを放棄したあと、アメリカは NATO を東欧諸国に拡大するかどうかという問題だった。

つまり「我々は統一ドイツは認める。しかし米国はそれで収まるのか、NATO を東ドイツ側にも拡大するつもりがあるのか」という問いかけだった。

◆アメリカは「しない」と会談では約束したが（各種証言あり）。公式文書では確認されていない。「口約束は外交では通用せず」である。

◆駐ソ米大使・マトロックの証言： ブッシュはアメリカが安全保障上の「優位性をかちとるつもりはない」との「非公式の了解」を示した（『帝国の解剖学』）。マルタ会談でソ連側通訳を務めたバラシチェンコの証言： ゴルバチョフはソ連・東欧で起こっていることを「アメリカはソ連の安全保障の弱体化に利用しないか」と「直截にブッシュに尋ねた」。ブッシュは事業の「困難さをよく理解している、成功を期待している」と応じ「ゴルバチョフの懸念を払拭した」（『ソ連邦の崩壊』）。

◆しかし実際は、ソ連崩壊後も NATO は拡大・強化された。構成国は16カ国から東欧諸国・バルト三国を加え30ヶ国へと拡大した。このうちルーマニア、ポーランドにはミサイルが配備され、バルト三国にはNATO軍が駐留することとなった。

◆残る主要国はウクライナ（ジョージア）。

◆2008年、ルーマニアの首都ブカレストでの NATO 首脳会議はウクライナを「将来、加盟国にする」ことを決定。

◆ロシア側は「だまされた」といっている。現実にはこれはロシアにとって大きな脅威。

◆もちろんだからといって今回のウクライナ侵攻を合理化することはできない。

◆アメリカ・NATO 諸国の軍事強化を不問にふしておくことはできない。

◆なぜいまロシア侵攻か？（公式文書交換）

狭間にあるウクライナとは？

この二つの覇権の狭間にあるウクライナはどうなったか？

・独立後のウクライナでは、親西欧政権ができたり親口政権ができたりと揺れ動いてきた。どちらの政権も汚職・腐敗にまみれている。プーチンは「ロシアより酷い」と批判している。

◆貧富の格差は拡大し、国民は貧困に喘ぐ。ソ連時代、ウクライナは連邦内で一番生活水準が高かった。黒土地帯、重工業、人口5000万人の大国。それが生活崩壊の中で多くが西側の国に移民。人口は4000万人に減少。

◆一方、兵力は20万人を数え、ヨーロッパでロシア、フランスに次ぐ第三の軍事大国。ドイツ、17万人、日本自衛隊、24万人。

NATO問題

独立後初めは、NATO加盟に反対が国民の多数を占めた。

◆2010年にできたヤヌコーヴィチ政権は、「ウクライナはいかなる軍事同盟にも政治同盟にも入らない『非同盟』政策をとる」ことを法律として制定。

◆この政権は親口政権であり腐敗問題で2014年の「マイダン革命」で打倒されたので、どこまで本気であったかは不明。

◆ただ「非同盟」政策というのはウクライナでもありうることを私は初めて知った。

◆ウクライナ「中立化」の意味。

◆ヤヌコーヴィチ政権後、ポロシェンコ政権ができるまで「非同盟」政策を破棄し、NATO 入りを目指すようになる。2015年までに NATO 加盟を実現すると宣言。

◆このときプーチン政権は、ロシア海軍基地のあるクリミア半島を併合、今日に至る。

◆いまのゼレンスキー大統領のもとで NATO 化が進んだ。2021年にはウクライナ国内で米・NATO 軍6000人とウクライナ軍の合同軍事演習。米ミサイル配備)。

◆国民の最大の関心事は平和。そして貧困からの脱却と汚職のないまともな政治の回復。

以上、ウクライナ問題をみるときにのなにかの参考になれば幸いです。

トメ